

絶滅危惧植物園、絶滅危惧種保全温室

四季 彩の丘概要

英語名Perennial Garden（意味は宿根草園）。2011年7月1日より工事に備えて閉鎖し、2012年6月30日にリニューアルオープン。面積は5600㎡（旧宿根草園は6600㎡）。1000種類2000株を植栽。2013年4月には絶滅危惧植物園、チャイニーズガーデン（約1000㎡）、門がオープン。北山通りの賑わいを創出。

1. 絶滅危惧植物園

ナルトオウキ

Astragalus sikokianus マメ科

韓国と徳島県のみで自生が確認され国内では野生状態では絶滅してしまっている

当園のナルトオウキは平成20年7月7日に徳島大学薬学部附属薬用植物園から種子で導入されました。長澤園長（当時技術課長）が種子の整理をしている中で発見し平成24年8月31日に播種しました。絶滅危惧種園オープン直後の平成25年6月に植栽され、現在に至ります。国内における公的機関での植物の保有は当園と高知県立牧野植物園、徳島大学薬学部附属薬用植物園のみです。

ムジナモ

Aldrovanda vesiculosa モウセンゴケ科

1属1種からなる単型属で、日本を含むアジア、オーストラリア、ヨーロッパ、アフリカの日当たりの良い浅い池、沼、川の水たまりの中などに浮遊している水生の食虫植物です。日本では自生地は存在しません。人工栽培でのみ維持されています。当園のムジナモは旧巨椋池由来のもので、30年以上栽培されていた竹谷光二氏から譲受したものを栽培しています。

キブネダイオウ

Rumex nepalensis Sprenger var. *andreaanus* (Makino) Kitamura タデ科

絶滅寸前種。1993年には貴船川で絶滅したと考えられていた。2000年時には京都府絶滅寸前種として認定（今後10年以内に絶滅する可能性は50%以上）、環境省のレッドリストでは絶滅危惧1B類（EN）＝近い将来において野生での絶滅の危険性が高いものに認定されている。2003年に465個体あることが確認された。

絶滅危惧種栽培温室について

2015年2月着工、2015年6月30日竣工。面積150㎡、最大高さ4.6m。壁面は2.6m
暖房可能、冷房不可。最低温度15℃。総工費5600万円

特徴

1 純粋製造装置（400万円）及びドライミスト（600万円）

2 赤外線カットガラス（400万円）23000円/㎡ 普通のガラスは4000円/㎡

3 内張りカーテン ポリビニルアルコールを使った製品。結露しにくく保水するので冷たい水滴が落下して植物が痛むことはありません。保温性が高いので冬場の内張りに利用されます。